

新春講演会

教育を変えれば、日本は変わる

― 選択・責任・連帯という運営原理を ―

講師 橋爪大三郎・東京工業大学教授

教育の、どこがどう病んでいるのか

■誰も満足していないのに変わらない、日本の教育

まず、教育のどこがどう病んでいるのか。文部省などの言い方によると、日本の教育は世界でも稀にみる成功を納めた。日本人の識字率は世界に誇るべきものがあり、基本的な教科については世界のどこにも遜色がないレベルで、急速な近代化の基盤を培ってきた。これに嘘はないと思う。

しかし教育が非常に普及し、大衆化し、戦後社会も爛熟を迎えた七〇年代から、逆の側面が出てきたわけだ。教育に携わる者、教育に関係する者、誰もが現状に大変不満であるという事です。

まず親が不満である。普通に学校にやっても学力がつかない。そこで塾、予備校へやらなければいけない。競争が激し過ぎる。小さいうちからやれ中学受験だ、高校受験だ。お受験などといって幼稚園や小学校の受験もある。それから教師が頼りない。デモシカ先生などと言って優秀な人材が教師になつてくれな

い。どうも信頼感がない。学校にいじめが多い。安心して子供を預けられない。教師も大変不満です。まず親が自分勝手である。些細なことで、親が血相を変えてどなりこんでくる。そんなことは家庭でしつておいて下さいと言いたるところですが、逆に最近の親は、先生何とかしつて下さいと言つて。それから子供が大変なまま、いわゆる学級崩壊という現象が起るわけですが、これはどう考えても教師の責任というよりは、その前の家庭教育の問題があるのではないか。

また教員というのは、相対的に恵まれていない。一般企業のサラリーマンに比べて、賃金水準は大したことはありませんが、夏休みという多少のメリットはあっても、普段は大変忙しい。また、社会的な尊敬が得られない。昔であれば村一番、町一番の知識人ということで大変な名譽ある職業だったのですが、教育が行き届きますと、下手をすれば父兄も学歴からいって教師より上である。そういう

う威信の喪失に、教師も大変悩んでおります。

職場の人間関係も大変複雑で、自分の職場を事実上選べませんので、鳥合の衆になつていくという例があります。職場の中のいじめに等しいようなこともあ

るかもしれません。そういうことで、教師のチームワークが大変悪い。生徒も不満です。まず、授業がわからない。そしてつまらないということ、大勢の落ちこぼれ、不登校をよんでおります。それから教師が自分勝手である。クラス毎に方針が違つたりして、体罰などいろいろな問題が起ります。さらに受験競争が非常にきつ、時間がない。社会全体も不満です。親に限らず、一般企業に就いていけば、日本の学校教育は細かいことは教えるけれども、社会に出て社会人として役に立つことをちゃんと教えていない。大体教師や学校は不勉強で時代に遅れておる。コンピュータなんぞも、ちつともない。

こういうことで、誰も満足していない。ここまでは、皆さんよく承知なんです。不思議なことは、関係者が全員現状に不満であれば、すぐさま改革にとりかからなければならないのに、ちつとも改革が成し遂げられない。これが三千年前からずっと続いていることなんです。実に不思議なことなんです。この不満を結果するエネルギーが何処かで発散してしまつて、うまく国民の合意になつていない。ここにも一つ、わが国の問題があるかと思ふ。

■若者は、日本の教育を受けるに元気がなくなる

それでも若者は学校に行かなければならず、学校で教育を受けなければなら

ど、元気がなくなっていく。大学で学生という話すると、一年生でも、卒業を控えた三、四年生でも、だいたい二人に一人はこういうふうに言います。「先生、私は実は勉強が嫌いなんです」「なぜ勉強が嫌いなのに大学に入つたのか」「だって、親がそういうふうな言い方をするから」とか、「たまたま成績が良かったんでここにやると言われて来ましたが、これから私はどうしたらいいんでしょうか」「少し自分で考えてみたいんですけど」「どうやって考えたらいいんですか」「こういう会話が延々と続くわけです。

これは、中学校とか高校一年ぐらいまでに出ていて欲しい会話なんです。その頃は勉強勉強しているためにそういうことをきかんと議論せず、大学に入れば自由だからとか言われて、さて大学に入つて来たものの、「私はどういう人なの、ここはどこの」という状態になつてしまふ。これは、大学で勉強するところではありせん。なぜ大学に入つて来たのか、私は誰なのか、どういふふうな勉強した方がいいのか。こういう問題が日常的になつていく。

つまり知識への興味を失い、人生を生きる積極性を失い、他人任せ。本来勉強にせよ、仕事にせよ、人生にせよ、自分はこのことをやるんだと自分で納得して「よし、やるぞ」という積極性があつてはじめて、知識も頭に入つて来る。職業人としての自覚もついていく。大学というものは、そういう覚悟を決めて入つて来て欲しい場所なんです。そこまでの受験のプロセスが余りにこたやちやして、敷かれたレールの通りに走らなければならないというふうになつておりますと、とにかくそこを通過することが唯一の目的になつてしまふ。大学に入つた先についての想像力が欠けている。

これは、自我を確立する時期の青年にとつて、大変不幸なことではないか。私はこれをアノミー、無規範と呼びたい。自分がいかにあるべきか、どう行動すべきか。それを自分で納得し、それをエネルギーにして青春時代を過ごしていく。これが青少年に望まれるべきことでありましようが、その原動力となるべき規範

感覚、社会人としての自覚、そういうものを育てるチャンスを失っている。これが教育システムの一番の根本的な問題ではないか。

■教育力の源泉「連帯」を見失つた教師集団

次に教師集団ですが、小中高などに言えることは、教師集団のチームワーク―教師の連帯と私は呼んでおりますが―連帯が失われている。公立小中学校の教員任用システムは、まず教員免許を持つている人を対象に、都道府県ごとに試験を行ないます。この試験が大変難しい上、採用人員が大変少ない。事実上、先生にならなくてもなかなかないという状況があります。何故かという、団塊の世代が既に先生になつてしまつていて、その人たちが現職に座っている限り、空きがない。そこで若い人たちが先生になれなくて、大変不均等な年齢構成になつていく。

次にこの学校に行くかということですが、これは教育委員会内部のローテーションがあつて、本人の同意も内々には求められませんが、原則からいへば言われた所に行かなくちゃいけない。簡単にいえば、鳥合の衆であります。

こんなことを聞いたこともありません。問題のある先生というのはいはるわけで、教育委員会としても扱いに困る。そうすると校内暴力もなしに、成績のいい子が集まつていく。問題ないという子、そういう学校に送らうということになり、そういうところに問題のある先生が集まつてしまふ。吹きだまりですね。そうすると、暫くは学校の体裁を成しているが、何年かすると急に生徒が暴れ出して、典型的な暴力学校になつてしまふ。直るのに十年もかかつたという例もありますが、これ

などは、教育委員会が作り出した暴力校ではないか。こういうふうな教員の間のチームワーク、連帯ができない構造になつていく。これは大変な問題ではないでしょうか。

校長先生というのは、退任の間際に三年間ぐらい名義職みたいにしてなるので、事なかれ主義の固まりみたく、とにかく責任をとらうとしない。いじめがあつたなんて先生が言おうものなら、よく調べてみなさい。できればなかったことにしたいわけですね。制度通りになつていくか、教頭先生に話を通したかと、そんなことばかり言つていく。これで教育ができると思つたら大間違いです。

現場にやる気と責任感が欠如したの、学習指導要領と検定教科書のせいだと思ひます。とくに今の学習指導要領は、何をいつ教えるかというのを詳しく決めていく。例えば学年別配当漢字というのがあつて、一年生で習う漢字はこれ、二年生で習う漢字はこれと、全部決まつていく。覚えの早い子も遅い子も、一緒にそのペースで覚えていかないとけない。ですからクラス一斉に、すべての子供を同じとみなして教えていく。

そこでどうなるかという、わかる子は退屈します。学力が伸びないから塾に行く。わからない子はわからないので、そのうち我慢の緒が切れ関心なくなつてしまひます。つまり落ちこぼれです。クラス一斉授業というのを続けている限り、中学三年までの間に半分ぐらいの子は落ちこぼれ、半分ぐらいの子は塾や何かで学力を伸ばしていく。公立学校の授業が成立しているように見えるのは、みんなが塾で学力をつけているからであつて、学校で学力をつけているわけではないのです。

教育を変えれば、人間が変わる

■小中学校（人間基礎教育）を変える

― 親の選択・責任・校長の説明責任 ―

育の当事者に取り戻すことだと思ひます。そのためにはまず、学区制をなくす。そして校長に権限を集中する、この二つだと思ひます。学区制というのは、昭和



橋爪大三郎 (はしづめだいさぶろう)

●東京工業大学教授(社会学)

1948年生まれ。東京大学大学院博士課程修了(社会学専攻)。学生時代から構造主義をふまえた「言語派社会学」の樹立をめざして執筆活動を続け、性、言語、権力を三つの説明原理とする「記号空間論」の構想を展開。フリーで執筆活動を続けた後、88年東工大助教授、のち教授。社会生産性本部の教育改革提案作成に携わる。著書多数。

6面から続く

十六年に尋常小学校が廃止されて国民学校になった時に導入されたもので、ドイツのフォルクスシュール、ファシズムの学校を真似した、生徒を管理するための組織です。こんなものは一刻も早くなくして、親が公立学校の中から好きなものを選ぶようにすべきだ。

そうすると、いい意味での学校間の競争が生まれます。校長が独自性を発揮して良い教育をしたところには、それなりに生徒、児童が集まるでしょう。手を抜いたところやチームワークが乱れたところは減っていくでしょう。当然努力しなくちゃいけないわけです。

同時に、校長にも自由度を与えないといけません。それは人事権、予算権、カリキュラムを決める教務権、この三つを合わせたものでなければいけない。教育委員会や文部省に言われた通りに教育をするのではなく、校長先生がその見識に基づいて、わが校ではこれだけの教育実績をあげますと親に約束し説明し、信頼すべき先生方を集めて、チームワークをもって授業に当たる。人事権はなぜ大切かと言うと、その学校に校長先生の方針を理解し、支持している先生を集めるためです。授業に失敗すれば、自分が首になって責任を取らなければならぬかもしれないし、チームとしての責任を問われて校長先生以下全とつかえになってしまいかもしれない。自分の職を守るために真剣に教育をしなければならぬ。他のビジネスでは当たり前のことですが、そういう当たり前のことを学校にも行なうたらどうでしょう。

校長先生に権限を集中するというと、何か独裁者と思われたり、また今の校長先生を見ていてもとても心配になります。私が言っているのはそういうことではありません。五人なり十人なりの教員チームの中で「あなた校長になって下さい」と、かついでもらえるような人が初めて、校長として立候補できるわけです。校長は当然公募制になる。そういう教員チームのリーダーという事です。ですから、教員チームがある小学校、ある中学校の教育を請け負うプランを出し合うという、コンペのようなことになると思

います。

では誰が校長を採用したり、結果を評価して校長を首にしたり、また続けて下さいと言ったりするのか。これは教育委員会ではありません。もちろん文部省でもありません。これは学校理事会というものにしたらいい。地域の有識者、親の代表などで構成されたらいいと思います。ここで校長先生・教員チームのプランを審査して「じゃあ、あなた五年間校長をやってみなさい」とこんなふうな頼む。五年経ったら審査する。このボードが校長先生の教育効果をきちんと判定できるように、客観的な外部テスト、いわゆる業者テストというものをきちんと活用しなければならぬ。

■高校「社会の基本教育」を変える
生徒の自己選択・学習責任
高等学校には、今は九六パーセントの生徒が高校に進学しているわけですが、設置主体が違つか義務教育ではないという理由で、高校入試というのがあります。この結果どうなるかというのと、偏差値輪切りの原則に従って、上位校といわれる学校から底辺校といわれる学校まで、同じような偏差値の生徒が集まってしまおうというふうになる。

底辺校といわれるところでは、分数の計算ができない、英語の基本的な単語がわかっていない人たちが入ってくるわけですから、高校の授業になりません。彼らに必要なのは小学校の復習であり、中学校の復習です。しかしそれをやったのでは、今の制度では高校にならない。仕方がないから、高校の内容を教える。教えるもわからないものを、教える方も聞く方も苦痛です。ですから高等学校の三分の一は、三年間高校生を閉じ込めておくだけの場所になってしまっている。こういうことを放置しているから、援助交際だとか何だとか、高校生の病理的現象が起きていると思えます。

小学校や中学校の補習をしても、高校という名前を与えるためにはどうしたらいいか。それは出口でちゃんと試験をする。高校、高等学校学力検定試験というものを、大検よりも簡単にして取り入れる。そうすると上位校の方だった、高校一年で取れてしまいかもしれない。

その後は、もつと得意な勉強をしていけばいいでしょう。底辺校だと、三年間から取れないと取れないかもしれない。もちろん、高検の資格を取れないといういが、就職に差し支えるということになると、これは取っておくという動機が働きます。すると妥協の余地のない試験ですから、先生と生徒の間に連帯が生まれ、高校に通う目的が生まれます。高検があるということがわかれば、小学校、中学校でも高検にパスするように勉強していくというドライブがかかります。

■大学「専門教育・学術教育」を変える
自由・競争・公開の原則
大学は何といつても、入試の廃止です。あと十年もすると、大学の進学志望者と入学定員とが一致する、高校と同じ現象が起きます。そうすると、高校と同じような無意味な試験が存在することになりますから、これはなくしたい。そうすると、一ヶ所に集中するのではないかと心配する人がいますが、そんなことはないと思います。二つのやり方があるんですが、一つは卒業試験を厳格にする。これは高校と違って、大学毎にレベルが違うのは当たり前で、まず頭を切り替える必要はありません。ノーベル賞クラスの学者を集め、世界的な業績をあげて大学院に進んでいくという大学は、卒業に必要な成績を事前に公表する。そこから逆算して一年生から二年生に上がる時に、これくらいの単位で、これくらいのレベルの問題を解いてもらわないと困る」と公表しておく。それにずっとついていく、卒業できる自信のある人がそこに行けばいいわけですから、むやみやたらに集まるということはありません。仮に入ってもはじき出されますし、入っただけで卒業しなければ、社会的な評価は得られませんから。

一般の大学は、それぞれの自分の学校の卒業水準というのを自分で決めればいい。これでだいたい人材が分散します。次に奨学金が重要です。今学生が勉強しないのは、コスト意識がないことが原因だと思えます。一人あたりのコストを調べてみたところ、国立大学の学生一人当たりの教育に年間一八〇万円がかか

ています。しかし今学生が負担しているのは、四六万円です。ですから、四分の一から五分の一位しか負担していない。これだけのコストはきちんと払ってもらわないと困る。一八〇万円プラス年間の生活費が一八〇万円、四年間で二二〇万円、これを負担してもらおうじゃないかと。親が払うのは禁止した方がいい。親が払うのは所得に従って進路が規定されてしまおうという、大変望ましくないことが起きます。親の所得と進路は関係ない方がいいですから、親は原則払わず本人が払う。本人はお金がないので、銀行ローンで貸し付ける。こういうふうにします。

同時に学内奨学金という制度をつくりたい。

例えば、一学年二五〇〇人くらいで、一人規模の大学があったとします。成績が下から三〇パーセントの人は全額払っていただく。丸々払えば無試験ですから、大学に行くことはできる。こういう形で大学に行くかどうかは本人の自由です。卒業するかどうかも本人の頑張り次第です。次に、上位五〇〇番までの人は学費全額免除。これは成績の良い人ですから、大学のために世の中の人は是非来てもらいたい。上位七割の人は何らかの形で払い戻しを受ける。計算したところでは、三七五〇番目の人、大体上から三分の一くらいの成績の人は、学費は二分の一になります。ですからローンの額もかなり圧縮される。

成績を上げれば上げるほど月謝が安くなつていくわけですから、大学に入った後も一生懸命勉強するでしょう。なお上位五〇〇人の内、さらに優れた人たちに對しては、生活費に對しても補助を与えます。トップクラスの成績の人たちは、学費も生活費も免除で、是非大学に来て下さい。こういうシステムです。

これを大学毎にやるのが重要です。大学毎にやればこの大学でも、いわば特待生に類する人がいるわけですから、人材が満遍なく散らばります。例えば今の時期に大学に手紙を出して、高検はもう入るパス、TOEFLは何点、物理

は駿台物理で三段ですとか、生徒会長もやりましたとか、いろいろ書類にして大学に送ります。するとA大学からは、あなたは七〇〇番なので残念ながら奨学金はありません。B大学からはあなたは三七五〇番なので学費半分の奨学金をあげられる。C大学からは五〇〇番なので学費は免除です。生活費は自分で払って下さい。そして南カルフート大学があったとして、ちょっと遠いんですが、あなたは生活費も全部払ってあげるから是非来て下さい、あなたは一番です。

ここからどれを選ぶのも、自分の人生です。お金がある人は全額払ってA大学に行くのもいいでしょう。でも経済的な事情で、南カルフート大学に行ってもいいじゃありませんか。それはそれで個人のキャリアアップでしっかり教育するわけですから、自分のプライドになりこそすれ、何のマイナスにもならない。こういうふうにして、大学生の勉強とモラル、そして大学にいる理由を是非確認してもらいたい。

さて、残った時間で政治の話をしていきたいと思います。皆で何事かを決める、これが政治の根本だと思ふんですが、そこには人々の価値観、意志決定が集積しています。一人一人が独立して物事を判断する能力がなければ、政治という現象は起こりません。日本では、自分という価値観に基づいて意志決定をしているかという、そのプロセスの自覚がないので、とかく長いものに巻かれるとか、流れでそうなるってしまふとかになる。何で大学に来たのかわからないけど来ちゃったという学生を、あまり笑えないところがあるわけです。

どういう時でも、自分で責任を持つて意志決定をしていかなければならぬ。私の教育改革のタイトルは「選択、責任、連帯の教育改革」ですが、連帯というのは社会学の用語で、お互いの立場を守るというような意味です。単なる「仲良く」というのと違って、その前に

らいたい。

大学改革は学生に苛酷になつていくわけですが、教員にも苛酷でなければいけない。そこでこれは報告書には書きませんが、私の心積りを申し上げれば例えは南関東大学教員人材活用センターというものを作り、関東地方の大学教員を皆そこに移籍して収容してしまふ。そして元の大学であれ、よその大学であれ、そこから呼びがかかった場合だけ、五年契約で元のポジションに出向して講義する。五年毎に審査があり、教授は五年経って業績がない場合、助教に格下げし、さらに業績がなければ助手に格下げとか。そういうこともやってもいいと思います。

教員の間にも任期制とか異動の自由ということを導入して、やる気があつて将来性があり、業績を上げるという人たちに、きちんとした待遇をしていくという、そういう厳しさが教員の中にもなければいけない。

「選択」「自己責任」がはっきりあつて、個々人が自分の人生を設計して生き方を決め、その結果お互いに持場を果たし合つて協力関係、つまり連帯が生まれてくる、こういう順序じゃないといけないと思うからです。これは、政治と同じ構造をもつていると私は思います。民主主義の再構築、あるいは市民の再構築と言つてもいい。私は「市民」という言葉を使うのに、長い間抵抗がありました。わが国では一九七〇年か八〇年くらいまで、市民と言うと「左翼のシンパ」という意味に使われておりましたので。しかし、誰もが市民であると思えます。自分で責任を持つて、民主主義のルールを守つて自己決定し、社会的な連帯を呼びかけている人であれば、これは市民じゃなくて何だろう。そういう意味で市民の精神を再構築する、そういうことがまず第一。教育改革の目的として、公共性とか

教育を変えれば、政治が変わる

社会運営のルールとしての「選択・責任・連帯」

7面から続く

社会的責任性とか規範という感覚を大事にしように申し上げましたが、ちょっとご注意願いたい。例えば援助交際とかに對して、これは道徳が足りないからだ、修身をやつていないからだ、大学の中に道徳の時間、修身の時間を取り上げようというようなことを言う人がいますが、これはあまりいい考えではないと思います。

選択・責任・連帯というのは社会の原則そのものですから、社会生活全体の中で体得していくしかない。家庭の中で体得し、つまり親が大学の学費を出さないという事実の前でこれを体得し、学校で体得する。つまり高校をパスしない限り、高校卒業のライセンスは得られないという事実の前で体得し、ということでしょう。決して、週一回の道徳の時間で体得すべきものじゃない。そんなものはただの知識ですから、やるだけ時間の無駄である。そうではなく、学校自身をこの原理で運営する。社会自身をこの原理で運営する。そしてそのことを青少年

にわかつてもらって、希望を持ってもらう。これが私の解答です。

同じように、教育改革についても考えなければならぬ。今の教育改革は中央教育審議会、中教審が主導していますが、このやり方が間違いだとは思いますが、中教審に限らず、審議会などというものは民主主義と何の関係もない。

民主主義の原則は、国会が国権の最高機関であつて、こゝで有権者の代表である政治家がきちんと議論し、最適のプランを戦わせてこゝで政策を決定する。したがつて、教育改革の原点は国会でなければなりません。しかし、教育改革に限らず国会でそういった議論なんかないですね。国会が空洞化しているの、国会の代わりに政権党である自民党が意志決定をしてきた。その自民党は官庁のレクチャーを受け、意志決定をしまわつては民主主義が踏みじられたことになつてしまつたので、審議会というものを作つて、こゝに各界の有識者と称する人たちを集めて議論したという形式にする。

今回の中教審の方針もそうです。私が教育改革で一番問題だと思つてい

のは、ナチスの真似をしたフォルクスシュレの時代の学校教育システム。中央が末端をコントロールするという教師不信、親不信の教育システムを変えないと駄目だということ。このシステムの中心に入つて改革すれば、これを追認してしまふことになりまふ。そこで対抗プランを作つて、彼らにしてみれば雑音でしょうが、しかし国民にとつてみればもう一つの正論を掲げ、本当は国会の議論が必要だつたんだ、ということをおわかつてもらふ。これが、今回の私のプランの客観的な意味の一つだと思ひます。

これは政治です。教育は政治ではないんですが、教育改革をどう行なうかということは既に政治です。やり方をどうするかは主導権争い、これは国民の声によつて最終的に決まるわけですが、すでに政治改革の一步であると思ひます。

教育を変えれば、社会が変わる

最後に、教育を変えれば社会が変わる、ということだけお話しします。

教育改革は、他の問題とちよつと次元の違つた重大な問題を持つてゐる。教育の目的は何か。次の世代の市民、次の世代の日本人、次の世代の社会人を生み出す、そういう再生産のメカニズムが教育です。この再生産がうまくいつていないということが、問題なんですね。

次の世代の日本人の再生産に失敗するとなつてゐるか。現在の社会の社会構造や体制、日本的な構造問題やさまざまな制度、慣行、そういうものが十年経つても二十年経つても三十年経つても変わらなかつて、再生産されてしまつてゐる。今の教育システムに順応してそのまま大きくなつてきたような人たちに、そういう改革の積極性のある人たちが大勢生まれるとは考えにくい。もちろん生まれる

でしょうけれど、青年期の体験の原点が、大人の言ひなりに、体制のなすがままに大きくなつてしまつたという、そういう原点から改革の積極性は生まれにくい、私は思ふ。

ですから一刻も早く、若い人たちが自由に自分の生き方を決められる、自分の個性を大事にできる、そういう社会に對する、将来に對する信頼、大人に對する信頼を取り戻してもらひたい。これが教育改革の出発点です。

ですから、教育改革が一步でも二歩でも前に進んで、教育が変わりつつあるなと思つて、若い世代の人たちに大きな自信を生み出します。その自信は、自分たちが社会を変え、制度を変え、改革ができるんだという、そういう主体として登場してくれるのではないのでしょうか。ですから、教育改革が成功することは、教

育改革以外のさまざまな改革に積極的に取り組む、若い世代の人たちを生み出すという効果があると思ひます。

日本の教育は、今大変大きな曲角に來てゐる。教育というものは、知識だけを教へてゐるようには見えますが、これは大変な二ヒリズムを生み出している。学校で教える知識だけが知識であると。学校で教えない知識は、テストに出ないし点数にもならないからどうでもいい、そういう大きな二ヒリズムを生み出している。そういうことでは困ります。

そして受験そのものが、体制に順応し、規格の中で自分の位置を測定するという集団主義、画一主義を再生産している。いわば、「日本文化」の再生産です。受験自身が実は非常にイデオロギー的な制度であるわけ。このイデオロギーと戦つていかないと、人間一人一人が個を取り戻せない。そうだとしたら、やはりこの制度を叩き壊す。叩き壊すについては、それに代わる制度を構築する、こういうことではないかと思ひます。

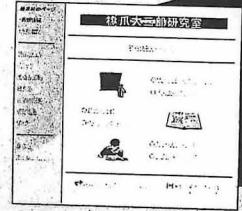
(文責・編集部)

おまけ『日経ネットナビ』第5巻第5号 p.229 日経BP社 2000 5.1 発行



橋爪大三郎 東京工業大学教授

理論社会学や、宗教社会学、中国研究などでおなじみの橋爪大三郎氏の大学内にある研究室のページ。最近の活動状況や雑誌や書籍のリスト、大学院授業や学部授業などの紹介ページがある。学部授業のページでは、年度ごとの授業のシラバスやレジュメ、生徒のレポート一覧などを見ることができ、彼の授業に興味がある人は一読の価値ありだ。最近の活動ページでは、いつ、どういった媒体に、どんな文章を書いているのかをリスト化して掲載。



橋爪大三郎研究室
http://www2.valdes.titech.ac.jp/~hashizm/

堤清二氏らとの鼎談を含んだ近著「選択・責任・連帯の教育改革(完全版)」(勁草書房)